

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 16 日現在

機関番号：12501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25670944

研究課題名(和文)がん体験者と子どもを含む家族のためのサポートプログラムパッケージの開発

研究課題名(英文)Development of support program for cancer survivors and their children.

研究代表者

増島 麻里子(Masujima, Mariko)

千葉大学・看護学研究科・准教授

研究者番号：40323414

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：研究目的は、がん体験者と子どもを含む家族へのサポートプログラム開発である。文献検討の結果、思春期の子どもに焦点をあてたプログラム開発に着手した。大学生461名への質問紙調査の結果、がん体験者の親をもつ子どもには、患者を支えるために家族ができること等の情報ニーズがあった。また、がん患者の子どもへの看護に熟練した専門看護師等5名へのインタビュー調査の結果、がん体験者・家族・看護師間では子どもへの関わりの意向に相違があり葛藤が生じる等、関わりの難しさが明らかとなった。最終的に、思春期の子どもに対するプログラムは、サポートグループの展開を検討したが、個別面談プログラムが妥当であるとの結論を得た。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop support program for cancer survivors and their children. As a result of literature review, we have decided to focus on adolescent children. The questionnaire survey to 461 university students, their information needs were identified such as "I don't know what I can do for my ailing parent". As a result of semi-structured interviews to five nurses, they had the difficulty of the relation to cancer survivor's children such as "Conflict of nurses because of a difference of the intention about the relationship with the children between cancer survivors, their family, and nurses". To provide care for adolescent children who have parents with cancer, the program was more effective an individual interview program than support group program.

研究分野：がん看護学

キーワード：がん AYA世代 家族看護 サポートプログラム

1. 研究開始当初の背景

(1)がんサバイバーシップの現状と課題

がん医療の発展に伴い、がんに罹患した後も長期にわたり、がんと共に過ごすがん体験者(がんサバイバー)が増加する状況にある。がんサバイバーシップの問題は、患者のみならず家族にも影響を与え、患者と共に生きる家族も“二次的ながんサバイバー”ともいわれる。がん患者の一番身近にいる配偶者や子ども、友人や親等の家族も、体験者と同様にがんや治療に関する情報を希求し、患者との関わり方を模索する状況にある。

(2)がんサバイバーと家族を含むサポートプログラムの現状

看護実践の場におけるがんサバイバーと家族を含むサポートについては、特にがんサバイバーの親を持つ子どもへの関わりが難しい現状にある。子どもの発達課題や特徴は、6歳未満、6～12歳、13歳以降で大きく異なる。国内のサポートグループプログラムには、がん疾患を特定するプログラム、患者と家族が同時に参加できるサポートグループプログラム、親ががんに罹患した子どものためのサポートプログラム等が存在する。しかし、大半は海外で開発されたプログラムを基盤としており、我が国のがん体験者と家族のニーズに基づく日本独自のプログラムを検討する必要があると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、がん体験者と子どもを含む家族の生活の質向上を目指すサポートプログラムを開発することである。

本研究では、特定のがん疾患に限定しないプログラムの確立を目指し、以下の2点を明示する。

(1)我が国のがん体験者と子どもを含む家族のニーズに基づく効果的なサポートプログラムの構成内容と提供方法を開発する

(2)開発したサポートプログラムを実施し、構成内容と提供方法を具体的に明示する

3. 研究の方法

本研究は、以下の2段階の調査を経て、サポートプログラムの確立を目指した。

(1)第一段階(平成25～26年度)

がん体験者と子どもを含む家族を対象とするサポートプログラムのニーズ、および、効果的な構成内容と提供方法を明らかにするための文献レビューと実態調査を行った。

サポートプログラムに必要な構成内容と提供方法に関する文献レビュー

検索データベースは PsycINFO、MEDLINE、CINAHL にて、検索式 cancer AND parent AND (support program OR support group OR family support OR family program) NOT (pediatric cancer)、条件 2004～2014 年、Journals、ENGLISH として実施した。

がん体験者の親を持つ思春期の子どものためのニーズ調査

18～22歳の青年期の大学生(college aged young adult)に焦点を当て、親のがん罹患経験の実態と親のがん罹患に伴う情報と支援のニーズを明らかにするために、自記式質問紙調査を行った。

がん体験者の親を持つ思春期の子どもへのサポートプログラム開発の予備調査

基本的知識の習得およびネットワーク構築を目的に、がんの親を持つ子どもサポートの先駆的医療者が主催する研修会に参加した。また、がん体験者とその子どもに対して、看護師が行う/必要と考える支援と、支援する際の困難を明らかにするために、子どもサポートを積極的に行う看護師を対象に半構造的インタビュー調査を行った。

(2)第二段階(平成27年度)

がん体験者の親を持つ思春期の子どもに焦点化したサポートプログラムの開発と展開を行った。

がん体験者の親を持つ思春期の子どもへのサポートプログラムの展開

がん体験者の親を持つ思春期の子ども用

サポートプログラム試行版の実施および評価を行うために、2種の形態（サポートグループプログラム、個別面談）を行った。

4. 研究成果

(1) 第一段階（平成 25～26 年度）

サポートプログラムに必要な構成内容と提供方法に関する文献レビュー

該当した文献は 87 件であった。目的に合致する文献を選定した結果、分析対象文献は、介入評価研究 3 件とシステマティックレビュー内で分析された介入研究 7 件を追加し、計 10 件とした。プログラムは、主に定期的なグループミーティングを中心に構成され、対象年齢は 4～18 歳、それぞれのプログラムは年齢別のグループとする等が明らかになった。最終的に、我が国においては、思春期の子どもに対するサポートプログラム開発の必要性が示唆された。

がん体験者の親を持つ思春期の子どものためのニーズ調査

アンケート調査票は、大学生 595 名に配布、489 名より回収（回収率 82.2%）、461 名を分析対象（有効回答率 94.3%）とした。

247 名（53.6%）が親や祖父母、友人の親などの身近な人のがん罹患を経験し、43 名（9.3%）ががん罹患患者との同居経験有、15 名（3.3%）が親のがん罹患を実際に経験していた。対象者の親のがん罹患を想定あるいは実際に経験したときのがん関連の情報ニーズは、<がんの治療><がんの再発・転移、予後>等について 70%が“非常に知りたい”と回答した。実際に親のがん罹患経験者に限定した場合のがん関連の情報ニーズは、<患者を支えるために家族ができること>が最も高く、<がんの再発・転移、予後>、<がんの治療によって生じる副作用や後遺症>等について 80%以上が“非常に知りたい”と回答した。親のがん罹患を想定あるいは実際に経験したときの子どもへの支援の場として“是非利用したい”と答えた者が最も多かったのは、

<医療者に実際に会って相談できる場> <医療者による対面式の学習会>であった（表 1）。

表 1 最も利用したいと思う支援

	最も利用したい支援の内容	n
1	2) 親ががんであることに伴って生じた悩みや困っていることを医療者に実際に会って相談できる場	145
2	1) がんやがんの治療に関する基本的な知識を得るための医療者による対面式の学習会	124
3	3) 親ががんと診断された自分と同年代の子どもが集まり、実際に会って自由に思いを話せる場	51
4	4) 親ががんであることに伴って生じた悩みや困っていることをインターネット上で医療者に相談できる場	48
5	5) がんやがんの治療に関する基本的な知識を得るためのインターネットによる子ども（中高生）向けの情報サイト	31
6	4) がんと診断された患者とその子どもを含む家族が集まり、インターネット上で医療者に相談できる場	22
7	7) 親ががんと診断された自分と同年代の子ども同士が集まり、インターネット上で自由に思いを話せる場	14
8	8) 親ががんと診断された患者とその子どもを含む家族が集まり、インターネット上で自由に思いを話せる場	8
	計	443

がん体験者の親を持つ思春期の子どもへのサポートプログラム開発の予備調査

対象者は 5 名で全員女性であり、看護師経験年数は平均 12.4 年、4 名は看護専門資格を有していた。

質的帰納的分析の結果、がん体験者とその子どもへの支援を行う際の困難は、最終的に“がん体験者とその子どもと接する時間やシステムが整っておらず、十分な支援につながらない”、“思春期にあるがん体験者の子どもは、その発達特性から関わり方が難しい”等 8 つのカテゴリーの内容が明らかにされた。

(2) 第二段階（平成 27 年度）

がん体験者の親を持つ思春期の子どもへのサポートプログラムの展開

サポートグループプログラムに関する研究候補者へのアプローチは、乳がん患者サポートグループプログラム、がん診療連携拠点病院の乳腺婦人科病棟、がん診療連携拠点病院の外来の 3 つの場で行った。研究対象候補者の子どもの親 12 名に研究説明を行い、研究協力依頼書等を 8 名に配布した。しかし、最終的に研究期間内に同意が得られた者はいなかった。これは、サンプリング期間

と範囲が限られていたため、本研究の対象となる母集団が少なく、対象者が得られにくい状況であった可能性、および、プログラム実施方法であるグループディスカッションが、対象者の期待する方法と合致していなかった可能性が考えられた。

個別面談は3名に実施し、プログラム提供方法や時期について考察を得た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

Ikuyo Nagasaka, Mariko Masujima, Miwa Watanabe, Naho Sato, Tomoko Majima: When a parent has cancer: Information and support needs of college-aged young adults in Japan. 19th EAFONS Abstract Book Poster Presentation, 査読有, 2016, pp 439-440.

Miwa Watanabe, Mariko Masujima, Ikuyo Nagasaka, Tomoko Majima, Naho Sato, Kumi Kanno: Difficulty when nurses support cancer survivors and their children. 19th EAFONS Abstract Book Poster Presentation, 査読有, 2016, pp443-444.

〔学会発表〕(計2件)

Ikuyo Nagasaka 他: When a parent has cancer: Information and support needs of college-aged young adults in Japan. 19th East Asian Forum of Nursing Scholars, 平成28年3月14日, 幕張メッセ国際会議場(千葉県千葉市).

Miwa Watanabe 他: Difficulty when nurses support cancer survivors and their children. 19th East Asian Forum of Nursing Scholars, 平成28年3月14日, 幕張メッセ国際会議場(千葉県千葉市).

6. 研究組織

(1)研究代表者

増島 麻里子 (MASUJIMA, Mariko)

千葉大学・大学院看護学研究科・准教授
研究者番号: 40323414

(2)研究分担者

長坂 育代 (NAGASAKA, Ikuyo)

千葉大学・大学院看護学研究科・特任准教授
研究者番号: 50346160

渡邊 美和 (WATABNABE, Miwa)

千葉大学・大学院看護学研究科・助教
研究者番号: 90554600

佐藤 奈保 (SATO, Naho)

千葉大学・大学院看護学研究科・准教授
研究者番号: 10291577

眞嶋 朋子 (MAJIMA, Tomoko)

千葉大学・大学院看護学研究科・教授
研究者番号: 50241112

関谷 昇 (SEKIYA, Noboru)

千葉大学・大学院人文社会学研究科・准教授
研究者番号: 00323387

楠 潤子 (KUSUNOKI, Junko)

千葉大学・大学院看護学研究科・助教
研究者番号: 30554597

菅野 久美 (Kanno, Kumi) 平成27年度

浜松医科大学・医学部看護学科・准教授
研究者番号: 20404890

(3)連携研究者

菅野 久美 (Kanno, Kumi) 平成26年度

千葉大学・大学院看護学研究科・助教
研究者番号: 20404890

(4)研究協力者 <平成27年度>

大野 朋加 (Ono, Tomoka)

奥 朋子 (OKU, Tomoko)

佐藤 さやか (SATO, Sayaka)